

プロローグ

「黒板に刻んだ母校の思い出」

小田燈籠まつりや高校野球の応援団、
特産の小田うどんと銘菓ゆずっこ、
獅子舞、剣道部の雄姿——

教室の黒板を使い、5日間もかけて
生徒たちが描いた小田高校と小田の思い出です。
黒板アートは時間をかけて描いた作品が、
消されてしまう儚さがあります。
でも、自分が描いたものや描いていた時間は、
生徒たちの心にいつまでも残るはず。

今年5月、小田高校の分校化が決まりました。
来年4月には内子高校の分校になります。
分校になると多くのことが変わります。
名前はもちろん、校章、校訓、
新入生の制服も変わります。
校長先生はいなくなり、
教頭先生が分校長として勤務します。
でも、校舎と校歌は変わりません。
長い年月をかけて築いてきた
小田高の歴史や誇り、
地域の人々とのつながりも——

小田高校の名前がなくなっても、
ここでの思い出や地域への思いは消えない。
生徒たちの黒板アートには、
そんな願いも込められています。



守りたいのは、 「ハコ」だけじゃない。

この校舎には、
たくさんの「コト」が
詰まっているんだ――

学校という「ハコ」を残すだけでは、地域の未来にはつながりません。
大切なのは、生徒たちの学びが充実すること。
それを実現できる小田地域であるということ――
守るのは学校だけではなく、子どもたちの笑顔と未来、
そして小田高校と地域の人たちとの「つながり」ではないでしょうか。
分校化という地域の現実を突きつけられた今だからこそ、
地域とともにある学校の意義について一緒に考えてみませんか。



1_「オダカン」のコンテスト。全てのグループが発表し、本戦に出場するグループを決める 2_ 魅力化の取り組みの一つ「ふるさと講師縁」。小田出身の映画監督・富永昌敬さんと台本づくりに挑戦 3_ 生徒が全員参加する「オダカン」の会場の様子 4_ 町職員のガイドで小田深山を散策したフィールドワーク 5_ タブレットや遠隔授業などのICTを活用 6_ バイオマス発電所など地元企業を訪れて学ぶ



小田高等学校教頭
菊池 博喜さん

Interview

全校体制で起業家教育に協力

2年前に小田高校に来て、初めて「オダカン」を見たとき、これは面白いと直感しました。国や県が求めている新しい時代の教育に合致するし、生徒たちの学びに向かう姿勢と成長する姿を見て大きな可能性を感じたからです。

講師選定に頭を抱える学校が多い中、小田高に協力してくれる講師はどんどん増えています。今居先生の情熱と人間性もありますが、それを支える周りの先生

たち、全校体制の協力があるからできていることだと思います。講師の皆さんの多くに「また来たい」と感じさせる生徒たちも素晴らしいと思います。

本校は重点努力目標の中に「地域社会を担うグローバル人材の育成」をうたっています。「最先端」は言い過ぎかもしれませんが、今求められている確かな学力の育成に向け、しっかりと取り組んでいることを多くの人に知ってほしいです。

～高校魅力化への挑戦～

地域の灯を消さないために

ここ数年、分校化の危機に直面していた小田高校。生徒たちの学びを充実させることが高校の魅力化につながると、地域に開かれた特色ある学校づくりを始めます。その一つが「小田高版・起業家教育プログラム（以下、起業家教育）」です。新しい時代で活躍するために必要な能力を育む授業は、高校と地域の未来を照らす光となっています。

シリコンバレーが開いた扉

「小さな学校でも、面白い学びができることを内外に発信したい」と話すのは今居弘幸先生。平成29年4月に設置された魅力化推進室の室長です。同室の主な役割は学校と地域の窓口。学校と地域、行政などをつなげる企画を立案し実行します。

設置のきっかけは、世界的企業が集まるアメリカ・シリコンバレーとの遠隔授業。小田地域出身の神岡美咲さんが発案し、NPO法人シリコンバレージャパンユニバーシティの榎本博之学長などの協力で実現した授業です。世界とつながる機会が生徒の視野だけでなく、大人たちの希望も広げました。それから高校魅力化の柱となる推進室が設置され、起業家教育の取り組みが始まります。

目指せグローバル（※）な人材

起業家教育は、起業家を育成するためだけの教育ではありません。チャレンジ精神や探求心、情報を集め分析する能力、判断力と実行力、コミュニケーション能力など、起業家に必要な資質や新しい時代でも活躍で



「オダカン」で発表する生徒

きる能力を身に付けることを目指します。

林業現場やバイオマス発電所を訪れて地域の現状や課題を学ぶ「フィールドワーク」や、シリコンバレーの榎本さんをはじめ、世界を知る大人たちの話を聞く「特別講座」、ひとつのテーマについて全校生徒で会議する「オダカン」など、地域と世界を舞台に可能性を広げる授業は、小田高校の魅力の一つになりました。

見えてきた光

特筆すべきは「オダカン」の取り組み。各学年が協力して会議を進め、アイデアを実行計画にして発表するコンテストです。堂々としたプレゼンテーションに、大人たちが目を見張ります。「競争」しなくても「共創」すれば、いいものが作れる――。田舎の小さな高校だからこそできる面白い学びは、学校と地域の未来に希望を与えています。

Interview

地域の人たちに育ててもらえる小田高生

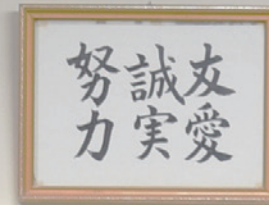
小田高校の魅力化の取り組みは、地域からの提案で始まりました。小田は土地柄も人柄もいいので、地域と結びつくことが最大の魅力になると考えています。地域の人々も積極的に協力してくれます。起業家教育などで年間40～50人の外部講師が来ていますが、多くの人が無償で授業を引き受けてくれます。「人づくりに関わることは町の未来への投資だから」と言ってくれる人もいまし

た。生徒たちに「帰ってきて」というのは簡単ですが、生徒たちが「帰ってきたい」という思いを醸成できるのは貴重な機会です。改めて小田高生は地域の人たちに育ててもらっていると思いました。

地域と思いを共有して手を取り合えば、学校の先生が変わっても起業家教育は続けられます。生徒たちの姿を見て、地域の皆さんにずっと残してほしいと思ってもらえる高校でありたいです。



小田高等学校魅力化推進室長
今居 弘幸さん



結果は分校化、でも—— 僕らは3年間向き合った

学校教育も部活動も、分校化も—— 結果だけが全てではない。学校存続と向き合って3年目。3年生になった生徒たちの言葉は、これまでの取り組みが間違いでなかったこと、起業家教育プログラムの魅力と可能性を教えてください。

考え続ける生徒たち

地域に高校がなくなる。本来なら大人が背負う課題に、生徒たちも一緒に向き合っています。「学校や地域のために、私たちは何ができるか」と、ことあるごとに口にして頑張ってきました。9月に三崎高校で行われた、各学校の地域課題を議論する「せんたんミーティング」では、参加した7校のうち、学校の存続を議題に挙げたのは小田高生だけだったそうです。その課題を「自分たちごと」と捉え、分校化が決まった今でも生徒たちは考え続けています。

生徒の成長を感じて

「もっと早く高校魅力化の取り組みが始まっていたら、結果は変わっていたかも」と悔やむ小田高の先生たち。地域の大きな課題に正面から向き合う生徒たちを見守り、その成長を感じています。石崎一水校長は「分校化は残念だけど、過程の取り組みには大きな成果があった。生徒たちは人とのつながりや感謝の心など、都会では薄れつつある価値が小田にあることを学び、成長している」と目を細めて話しました。



坂本 柚奈さん

大嫌いが大好きに——
私を変えた出会いに感謝

田舎が嫌で、ずっと都会へ行きたいと思っていました。部活動の剣道では、中学まで一緒に頑張った子たちが別の高校に行ってしまいました。小田高に入ったことを後悔した時期もあります。そんな私を変えてくれたのは、熱心な先生たちの姿です。縛り付けるのではなく、一人一人の個性を大切に伸ばしてくれます。起業家教育の活動でも個性が大切で、個性があるからこそ、いろいろな案が生まれることを学びました。私は2年生の頃から起業家教育に積極的に参加するようになり、そのような活動が好きだと気付きました。地域を元気にするためのプレゼンテーションやふるさとCMを作りながら、小田のいいところや人々の温かさに触れ、いつしか小田と小田高校が大好きな場所に変わりました。

将来は内子町に残って、地域のために何かしたいという気持ちが強くなっています。たくさんのお会いをくれた先生たちに感謝の気持ちでいっぱいです。



関本 克馬さん

仲間と支え合った3年間。
小田高に来て本当に良かった

小田高校を選んだのは、中学生の頃は人気がなくて、学校へ行けないことがあったからです。生徒数が少なくて寮もあり、遠くからでも通えることが主な理由でした。でも今は、この学校に来てよかったと思っています。最初は町外出身の自分を受け入れてもらえるか心配していましたが、杞憂に終わりました。みんな優しく、すぐに友達ができました。授業もICTを活用したものが多く、寮ではみんなで勉強するので成績が上がりました。想像以上に充実しています。

起業家教育や生徒会でたくさんの経験を積むことができました。以前は多くの人といることが嫌だったのですが、今は違います。小田高のみんなは、困っている人がいたら一人にはしません。苦しいときにみんなが助けてくれるのがいいところだと思います。周りに人がいることを楽しめるようになった小田高校に感謝しています。もうすぐ卒業と思うと本当に寂しいです。

高校存続は地域のカギ——
一人でもできることを考える

船本 優依さん



小田がすごく好きで、ずっとこのままであってほしいと願っています。そのためには小田高校の存続は欠かせないものでした。分校化が決まり、地域を守れないかもという焦りと不安を感じます。自分一人でも何かできることはないかと考え、最近は放課後の学校に残って平成17年度以降の旧小田町のことを調べています。もっと小田地域や小田高校を知ってもらうために、ウィキペディアのページを更新したいからです。

起業家教育の授業はすごいです。地域の皆さんが協力して、私たちの考える力や話す力を引き出してくれます。活躍する人々の仕事や考え方、地域への思いが直接聞ける特別な授業です。ほかの学校ではできない経験で、自分の向上心に火が付きしました。一緒に頑張ってきた後輩たちにも、あきらめないでと伝えたいです。魅力化の取り組みを楽しんで、いっぱい学んで、自分たちができることを少しでもいいから続けてほしいです。

地域の灯を消さないために、
人の心を動かす仕事をしたい

永居 泰成さん



1年生の時に先輩たちのビジネスプランの発表を聞いて、もっと面白いことを考えたいと興味を持ちました。3年間、起業家教育の授業を受け、実践的な学びの場だったと感じています。企画を実現するためには費用がいるし、人を集めるのも大変です。実際に仕事や町おこしをしている人の話を聞いて、課題の解決方法を考えることは、本当に貴重な体験でした。また、多くの人と関わることで、小田高校が地域の人々に支えられていることを実感しました。授業も部活動も、地域の皆さんの協力で充実しています。だから、地域の火を灯し続けるのが僕らの役割と思うようになりました。

「絶対に無理と思うことも、人の心を動かすことができるたら実現できる」。起業家教育で心に残っている言葉です。自分たちのビジネスプランも実現できるかもしれないと、希望を持つことができました。将来、地域の活性化につながる仕事に就いて、人の心を動かすような企画に挑戦したいです。

親身な先生

近くに塾がないなら、自分たちが力になりたい。親身な先生たちが生徒の学びを豊かにします。



観客が風を感じる 伝統の集団行動

自分だけが完璧な動きをしても、きれいな集団行動はできません。周りを見て、声を掛け合い、息を合わせることが大切。みんなで作る「最高」の集団行動が、人々に爽やかな風を送ります。



みんなが主役の 体育祭・文化祭

体育祭では、前の競技で顔が白くなり、それを落とす間もなく次の競技へ——。人数が少ないから大変ですが、それだけ役割と活躍の場、思い出がたくさんあります。

魅力化だけじゃない、小田高校の魅力

分校になっても、 きっと変わらない。

地域との交流

授業や祭りで地域の人々と交流する機会が多い小田高生。地域の人たちも温かく活動を見守ってくれます。



野球部最後の夏 全員・全力の応援が 選手の胸を熱くする

少人数でも応援では負けない。一人一人の思いが選手を後押しします。頑張る人はみんなで応援する。困っている人はみんなで助ける。その優しさは分校になっても、きっと変わりません。

Interview



山田 伊織さん(3年)

小田高校野球部、最後の夏——

小田高校の団結力に感動

小田高校の魅力は、他の学校の手本になるような団結力です。伝統ある集団行動は県内でも有名です。きびきびした行動や気持ちのいいあいさつは、集団行動で培っています。分校になっても、今まで先輩たちが築いてきた伝統を守りたいし、後輩たちにも受け継いでほしいです。

部活動の野球では、チームだけでなく学校全体の団結力を感じました。一番感

動したのが、夏の大会の小田高生の応援でした。相手高校に比べると人数は半分以下なのに、聞こえてくるのは倍以上の声——。心が一つにそろった声だったので、勇気と感謝の気持ちが込み上げてきました。地域の人たちも熱心で、幸せな環境で大好きな野球に打ち込みました。「小田高校野球部」としては最後の夏になってしまったけれど、悔いなく迎えられたことに感謝しています。

小田高校で初めての快挙

先生との二人三脚だから頑張れた

県の商業高等学校英語スピーチコンテストで最優秀賞を受賞し、1月12日に全国大会に出場することが決まりました。地元の人たちが「小田高校ってすごいね」と言ってくれて、うれしいです。受賞は親身に教えてくれる先生たちのおかげです。忙しい中、放課後も昼休みも時間を割いて指導してくれました。全国での入賞は難しいですがベストを尽くします。

小田高校のいいところは、先生と生徒の距離が近いことです。一人一人の個性を把握し、的確なアドバイスをくれます。熱心な先生ばかりで、進学を希望する生徒には徹底的に試験対策に付き合ってくれます。その姿からもたくさんのことを学び、ここで過ごせたこと自体が価値のあることと気付きました。大学に行っても一生懸命頑張っ、先生たちの思いに応えたいです。

Interview



大森 美里さん(3年)



旅するおむすび屋
菅本 香菜さん

小田高校の温かさに感動 すてきな出会いに感謝

武田さんとの縁で愛媛県での活動が始まり、そこで今居先生と出会い、小田高校での授業が実現しました。先生の「3年間、起業家教育プログラムを頑張った生徒たちへのご褒美にしたい」というすてきな思いを受け取り、楽しい授業になるよう頑張りました。

小田高校のみんなが素直で明るくて、びっくりしました。おむすびを提供する時間になると、授業のない先生が集まって、一緒におむすびをむすんでくれて、小さな学校だから築ける温かい空間なのかなと感動しました。

私は「おむすび」という、誰にとっても身近な食べ物を真ん中に、改めて自分の町を誇りに思ったり、いろんな世代の人がつながったり、食の大切さに気付いてもらったりしたら、という思いで活動しています。今回もいろんな縁がつながりました。ここからまたどんな風に縁がつながっていくか楽しみだし、みんなにも大切に育ててもらえたらうれしいです。



小田獅子舞保存会会長
富永 吉宏さん

伝えたいのは祭りの楽しさ そして、地域への思い——

小田獅子舞保存会で高校生に獅子舞と太鼓を教えています。町外から来た1年生も参加するので、地域の人との交流の場にもなっています。祭り当日や文化祭などで生徒が舞うときは、みんなで見に行きます。獅子舞をやってくれた子は、やはりかわいいもんです。

獅子舞は踊りを継承するだけでなく、思いもつなぎます。先輩たちに教わることで、地元のことや世代間の関わりなど、いろんなことをひっくりくめた「思い」が伝わります。その思いさえ継承できたら、カタチは変わってもいいのかもしれない。

学校存続の課題も根っこは同じ。思いをつなぐために、諦めないことが大切です。それを教えてくれたのは小田高校の生徒たちです。大切なことをきちんと教えてもらい、地域での活動も一生懸命。私もまだまだ頑張ろうという気持ちになります。青春真っ盛りの純粋な気持ちで、この地域の素晴らしさを体感してほしいです。私たちもずっとそのお手伝いをしたいと思います。



地域おこし協力隊
武田 惇奨さん

小田高での学びを忘れず 自分の未来を開いてほしい

起業家教育に地域おこし協力隊として参加し、生徒たちにビジネスのアドバイスなどをしました。僕を含め、いろんな種類の大人が生徒たちとつながることが、この授業の面白いところ。先生や親が歩んできた道以外の社会に触れることで、新しいことに挑戦する力が湧いてくると思います。

僕の高校生時代は、悪いイメージが先立ち、挑戦を諦めることが多かったように思えます。「無理」と思ったらそこから前には進めません。「失敗してもいいから、無理と言わずにやってみることが大切」と大学生時代に経験しました。

生徒のみんなは起業家教育でたくさんの壁にぶつかったと思います。そこで無理という言葉を読み込んで、仲間と一緒に解決策を考える——そんな勉強ができるのは本当にうらやましいことだと思います。社会に出ても小田高校で経験したことを忘れず、自分を諦めないで、たくさんの道を切り開いてほしいです。



11月5日、3年生の起業家教育の最後の授業。今居先生が用意したのは「おむすび」の授業でした。講師は、「旅するおむすび屋」になる夢を、クラウドファンディングでかなえた菅本香奈さん。おむすび仲間を募って全国各地を旅しています。今居先生は「この授業は本来なら、なかった授業。クラウドファンディングを学びたいという生徒がいて、同じタイミングで協力隊の武田さんから菅本さんを紹介してもらった。最後に生徒と地域の人が結んだ、特別な授業ができてうれしい」と明かします。

ある生徒が「出会いが大事」
は今居先生の好きな言葉。私たちにそれを実感させてくれて、たくさんの人とつながってくれる」と話してくれました。
人口が少なくても「人交」が多ければ、生徒たちの豊かな学びにつながります。地域に根差して活躍する人、広い世界に羽ばたいて地域に思いをはせる人、夢をかなえた人、さまざまな人と出会うことで、生徒たちは多くの選択肢を見つけ、自分や地域の未来を主体的に考えるようになったと言います。この小田高校の生徒たちを大きく成長させ、広い世界に羽ばたかせたい——。そう願う人たちがここにつながっています。

お結び。 人と人との つながりを結ぶ場所

年間40〜50人もの外部講師が授業をする小田高校。その出会いが生徒たちに新しい扉があることを教えてくれます。講師をした皆さんにお話を聞きました。



先生、地域の皆さん、
いつも見守ってくれてありがとう。
志を果たしに、いつの日にか戻ってきたい

小田高生のみんな、
ここで学んだことに自信を持って、
しっかりと人生を歩んでほしい——



守りたいのは、 「ココ」にある笑顔と未来。

— Special Feature ODA High School —

16／18歳という多感な時期に、教科書だけでなく地域に向き合ってもらえることは、地域にとっては本当に幸甚なこと。生徒たちが「帰ってきたい」と思える時間を、地域の人々と過ごすことができること。その時間が長ければ長いほど、地域の未来の力になるはず。

最後に魅力化推進室長の今居先生は言います。「君たちの学びは面白い。それは分校になっても変わらない。ここで学んだことや人々のつながりを大切にしたい、この先にある最高の人生に出会ってほしい」と。

小田から出ていく子も小田の子。小田に来てくれる子も小田の子。寮生でもお客さん扱いじゃなく、地域の子として扱ってくれる。そんな土地柄と人柄のよさが、生徒のすてきな笑顔を引き出します。たくさん笑顔と思いつく、学びと伝統、生徒と地域の未来。たくさんのコトが詰まった小田高校を、いつまでも大切に思っていてほしい——